

比島戦線の 軍旗小隊と当番兵

秋田県 日景岩藏

私は大正十(一九二二)年十二月二十五日、秋田県北秋田郡綾子村字岩谷の農家の女四人・男四人の八人兄弟の末っ子として生まれました。米作農家で徴兵検査までは青年学校に通い営林省に勤めていました。母は私が入隊する前に病死し、入隊するころは父・長兄夫婦と子供一人に私本人の五人家族でした。長兄は北海道開拓に行っていました。姉四人は全員嫁いでいました。

徴兵検査は、昭和十六(一九四二)年徴集で第一乙種合格で、甲種に繰り上げ現役入隊になりました。

昭和十八年一月十日に秋田の第八師団歩兵第十七連隊第十一中隊の留守部隊に入隊しました。師団長は横山静雄中将で、連隊長は藤重正従大佐、

中隊長は佐々木増藏中尉で老人でした。古年兵は秋田の人だったが、ビンタは結構多くもらいました。

昭和十八年三月二十日、秋田を出発、下関で輸送船に乗り、玄界灘の荒波を越えて釜山に上陸、ニンニクの臭いに閉口しながら輸送列車に乗車、朝鮮半島を一路北上、禿山の連続に大陸の気配を実感しながら、鴨緑江を渡り鮮満国境を通過、満州大陸の牡丹江省妥陽県妥南第八八部隊に編入されました。

第三大隊第十一中隊小銃班に配属され、直ちに利樹鎮金剛台の国境警備につくことになりました。北緯四五度の満州の冬はさすがに厳しく、素手で銃にさわるとピタッと凍りつき、無理にはがそうとすると手の皮がはがれる程のきびしい寒さでした。

初年兵としての一期の検閲も無事終わって間もなく、後から十八年徴集の初年兵が入ってきたの

で、私が初年兵の教育係に任命されましたので、初年兵としての期間は、他の兵隊よりも相当短くてすんだので、ビンタを喰うことも少なくてすんだことになりました。

当時、南方の戦局が次第に険悪化し、関東軍の精銳も櫛の歯が抜けるように南方に転出していきまされたので、我々もそのうちに！と覚悟していました。

初年兵は十九年徴集兵と、在満の召集兵が混合していました。

昭和十九年七月に部隊に動員下令と同時に、部隊命令で、各中隊から二人宛、軍旗旗護小隊要員として出すべしとなり、私と柴田上等兵が十一中隊から選ばれ、綏南の連隊本部に行きました。

七月末に釜山着、輸送船「第一修洋丸」に乗船、比島の北サンフェルナンドに向け出帆しましたが、途中台湾に近づいた頃、台湾が空襲されているとの情報に基づき、馬公近海で待機したこともあり

ました。

船は戦時標準船で五、〇〇〇トン級の貨物船で、対潜対空の訓練は勿論、被雷した時に備えて太い竹で編んだタタミ四帖半位の大きな筏を舷側にズラリとぶら下げていました。いざという時は綱を切って海面に落とし、その上に飛び降りる算段です。各自には救命胴衣が一個ずつ支給されましたが、浮いているうちに次第に沈むというので評判はあまり良くありませんでした。足に巻く脚絆は、水の中に入った時に、浮遊物に自分の体を縛りつけるのに使うため腰に巻きつけておきました。

釜山を出発して九州の三池港に集結し、十八隻の大船団になったところで三池港を出発しました。途中、対空、対潜の警戒に努め、敵潜が潜伏中の情報に一時、馬公にかくれたりしましたが、幸いにも十八隻が全船無事に目的地、比島の北サンフェルナンド港に到着しました。

まず目に入ったのは、椰子の樹の皮を焚いて走

るトロッコ機関車でした。そこで天幕生活を二日間やって朝マニラに向かって出発し、マニラに到着したのがその日の夜中でした。

マニラ近郊に駐屯すること二カ月でリパンに移動し、陣地構築に従事し、タコツボ掘りや、ゲリラに対して警戒を厳重にしました。ゲリラは最初は大したことは無かったが、次第に活発になり、対応にてこずるようになって、ゲリラ情報に緊張したものでした。

私達は軍旗小隊でしたので、一般の兵隊にくらべれば楽な立場にあったことは否定できないと思います。そのうちに旗手の佐藤康平少尉の当番をやっていたら、佐藤少尉が「日景、お前は近いうちに師団司令部に転属になるぞ。連隊長殿が申されていたから」と洩らされたので、私はびっくりして辞退しましたが、命令がまもなく出て司令部へ転属になりました。

連隊本部の伊藤班長が、護衛兵六人とトラックで師団司令部のあるサンタクララまで送ってくれ

ました。

着いて早速申告しましたが、金ピカの襟章の偉い人ばかりなのでビックリしました。将官・佐官がザラザラいました。

うちの連隊長が会議で師団司令部へ行っても、第十七連隊出身の当番が一人もいない。他の連隊の当番ばかりなのは「おかしい」と連隊長の意見で、日景が師団司令部の当番になったのだ、と上の人からいわれました。そのうち戦況が悪化して、マニラのマツキンレイにある官邸の当番になりました。

本間雅晴中将が住んでいたあとに、横山静雄師団長が入ったのでした。師団長の専属副官に呼ばれ、師団長の専属当番を命ぜられました。閣下は温厚な方で、私ら当番にも対等の扱いをされ、食事の際、自ら盃を下さいました。

「司令部は第一線ではないが頑張りなさい」と、いたわりの言葉をかけてくれました。当番長は、

岩手県出身の松嘉軍曹、私と同年兵の加藤上等兵と私の三人が当番で、軍属で調理人一人に専属副官大尉の五人が閣下の身の廻りの世話役でした。

私達の起居は作戦中は天幕生活でした。食糧は米、粉味噌、粉醤油、乾燥野菜、調味料、缶詰、ウイスキー、が閣下用としてありました。

閣下の下着類は私らが持つて歩きました。着替えを持参すると「ここへ掛けなさい」と、椅子をすすめてくれ「日本は必ず勝ちますから頑張りなさい」と、励ましの言葉をかけて下さる本当に温厚な閣下でした。

戦争末期頃は食糧も不足になり、サツマ芋の葉や川にいるエビやカニを採り、閣下の食膳に供しました。

閣下は第四十一軍司令官となり、振武集団長としてマニラ東方地区の日本軍を統括する任に就かれましたが、終戦の大詔が発せられ、米軍に降伏することになり、軍の角建之少将参謀長が軍使と

なり、米軍機に乗ってビラを撒き「終戦を確認す。戦争停止せよ」と呼び掛けました。

翌日、降伏が調印された。将官はモンタルパン収容所で独房に入り、一般はカランバ収容所に入られました。私は、閣下の当番兵として米軍に指示され、軍事裁判が始まるまで勤務しました。

横山閣下は食事の際、当番に飯を少し残し、「良かったら上がりなさい」とすすめ、タバコも一本くれました。

第十七連隊長・藤重正従大佐は、陸士時代に横山閣下と同期生でしたので、師団の会議の時はいつも上席に座っていました（昭和二十年六月十日少将）。

横山閣下も同期生だけに、多少遠慮勝ちなところが時々見受けられました。藤重部隊長は、戦犯裁判にかけられ処刑されております。横山閣下は戦犯にはなりませんでした。

モンタルパンでは山下閣下が、中の広場で椅子に掛け雑談しているとところを見ました。大きな人

で悠々として落ち着いていました。

昭和二十一年十二月十日、米軍のリバティ船で名古屋港に上陸しました。戦災で一面平な名古屋の街を見て、内地も戦争で大変だったことを痛感させられました。

秋田へ帰る沿線の都市が、空襲でやられたのを見て、戦争はやるものではないと痛い程知らされました。

幸い留守宅は皆無事で、私の帰りを喜んでくれました。軍旗小隊の定員は連隊長以下四十七人で、赤穂浪士の四十七士にちなんだそうです。